八木沢元著

霞城の春

―中国文学論集

明治書院

霞城の春—中国文学論集—　定価 3800 円

昭和 56 年 12 日 20 日　初 版 発 行

著　　者　©八木沢　元

発 行 者　東京都千代田区神田錦町 1-16
三　樹　彰

印 刷 者　長野市中御所町 2-30
田　中　忠

発 行 所　株式会社 明 治 書 院
〒101　東京都千代田区神田錦町 1-16
電話　東京 292-3741 (代)
振替口座　東京 3-4991 番

3098-20334-8305　大日本法令印刷　星共社製本

目次

霞城の春――序にかえて――……一
馮小青伝説と其の戯曲……五
牡丹亭の版本に関する一考察――臧懋循改訂本と茅氏朱墨本との関係に就いて――……二九
湯顕祖……三五
四太史雑劇について……三九
李開先とその戯曲……四八
明曲……八二
小青伝の資料……九六
琵琶記……一二三
李贄……一三〇
中国詩律学の諸問題……一三二
中国における送別の詩――王維の陽関曲を中心として――……一五一
明代藩王劇作家朱憲爵について……一七五
世説から新書・新語への発展――世説新語伝本考――……一八三
世説新語の世界……一九八

世説新語簡説……二〇一
七歩詩管窺……二〇五
七夕説話と中国文学……二三五
琴心劇考——琴心雅調を中心として——……二五二
年　譜……二六七
あとがき……二七〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霞城の春

――序にかえて――

昭和二五年一〇月、わたくしは札幌のエルムの学園から、山形大学に転任となった。山形駅頭に降り立ち、街の家並みを眺めて、札幌の繁華に比べて、心淋しさを感じた。

翌年四月、桜の季節を迎え、千歳公園、霞城公園・天童舞鶴公園・楯岡東沢公園に遊び、桜の下で杯を挙げ、大いに春色を賞した。山形に来て、初めて迎えた春であった。五月中旬が桜の満開期である札幌に比べ、当地はほぼ半月ほど早く、それだけ気候の温暖を示している。

当時、わたくしは明曲研究の志、大いに盛であったので、この年夏休みにはいるのを待って東京から京都に遊び、大いに中国の戯曲関係の資料を探り、一ヵ月の旅を終えて帰った。

翌年の春、内地留学の恩典に浴し、五月初めから東大に留学して明曲研究に従事、なおこの一年間、倉石博士の下で、中国語の再教育を受けた。帰学の後、中国文学の講義の外に、学生の希望によって中国語も教えることにし、今日に及んでいる。わたくしが中国語に関心を持つようになったのは、この時の内地留学が大いにあずかって力があったのである。わたくしは一年の東京留学中、主として内閣文庫・宮内庁書陵部・東洋文庫などに日参し、大いに明曲関係の珍しい資料を探った。東京滞在は都合上、一月一杯とし、二月一日から京都に転住、人文科学研究所の川勝義男氏の二階に寄寓し、種々お世話になった。そして京都大学文学部図書館と人文科学研究所に通い、研鑽に努めた。

わたくしは東大在学中から故塩谷温博士のご指導によって明曲研究にはいり、卒業後も引き続いてねばり強く続行

してきた。そしてこの一年間の留学で、得るところ多大であった。四月一〇日、京都を去るに際して吉野山に遊び、初めて吉野の桜を賞した。京都では古書に埋もれる日が多く、風流の時間を持ついとまに乏しかったので、円山公園の桜も鑑賞することができなかった。この日、吉野山中の千本の眺めを満喫することができた。こちらの桜の下から、うらうらと春霞たなびく如意輪堂のあたりの桜の雲を遠望し、歴史の糸をたぐって旧時を追懐し、感嘆これを久しうした。

翌昭和二八年、二九年の二カ年間、文部省科学研究費の交付を受けたので、一層研究に精進、資料を各地に採訪して、多くの資料をマイクロフィルムに撮影した。

こうしてわたくしの長年の研究は、漸く熟して来たのであるが、不幸にして過労のため病にかかり、山形市立病院に入院を余儀なくされたのである。しかし幸にして故館長米地博士のお世話になり、約半歳にして健康を回復し、学園に帰ることができた。

そして退院後、直ちに研究の結果を整理し、従来のわたくしの明曲研究のうち、最も心血を注いで来た明代劇作家に関するものだけを一先ずまとめることにして執筆にかかり、二年有半の歳月を費して漸く脱稿を終え、昭和三一年一二月、東京大学に提出、倉石博士などの審査を経て、東大教授会をパスし、三二年一一月一五日、文学博士の学位を得た。その時、わたくしは五一歳であった。その翌年、わたくしの学位論文は、文部省の研究成果刊行補助金をいただいて、講談社から刊行となった。その後、数年を経て、香港大学の羅錦堂博士から、翻訳希望の書翰を頂き、香港の竜門書店から出版となった。博士は米国哈仏大学（ハーバード）、哈仏燕京学社の出版補助を得て、二年間の苦心努力を重ねて、訳業を終えられたという。それは昭和三九年のことである。博士は現在、ハワイ大学教授の地位にあり、中国古典戯曲研究の権威で、著書が極めて多い。

わたくしは従来、山形の専門課程の中国文学講読のテキストとして「遊仙窟」を使用したところ、案外評判がよく、

聴講者も多数だったので、これを使用すること数回に及んだ。わたくしは「遊仙窟」を講じて大いに興味を感じたので、この小説の資料蒐集に努めたため、相当の分量に達した。そこで一先ずこの解釈書を作って世に送ろうと思い、執筆を開始して四年にして漸く脱稿、明治書院から出版となった。

「遊仙窟」は、中国唐初最初の恋愛小説で、六朝の変異奇怪の作風を離脱、人生をテーマとし、真向に人間の世界が描かれ、伝神の彩筆を揮って人生の奇を美事に描いたこの小説は、唐代伝奇中、随一の傑作として知られている。奈良朝時代、文武天皇の慶雲年間のころ、本邦に伝来し、平安朝物語小説の発生を促し、日本文学に大きな影響を与えた小説として世人のあまねく知るところである。

その後、三年間、六朝志人小説の代表作として知られる「世説新語」の調査を行ない、昨年一〇月、明徳出版社から中国古典新書中の一冊として出版した。こうして最近一〇年間、わたくしは中国の古小説の勉強に努めた。

わたくしは山形在任中、夏にはよく米沢郊外の白布高湯温泉に行き、最近では正月に、天童の出羽路荘に滞在するのを常としている。昨年は、五月に会津若松に旅して、白虎隊の遺跡を訪ね、一〇月には十和田湖に紅葉を賞し、東北の秋色を探った。「琅玕の玉をとかして」と詠じた九条武子夫人の話を聞き、紺碧の湖の色を称えたその表現の美しさに感嘆した。帰途、平泉に赴き、中尊寺に遊んだ。

わたくしは山形在任中、東北大学文学部の講師を併任し、三年に一度、講義に当った。此処では大学院の学生が中心なので、専攻の中国古典戯曲を講ずることができたのは愉快であった。一昨年の大学紛争の時は、物に動じないわたくしも大い困惑した。が皆様のご努力により、驥尾に付して、今日を迎えることができたのは、幸であった。

昭和四六年二月六日、わたくしは人文学部国語国文学研究室、及び文理学部国語国文学専攻卒業生の主催によって、「中国における送別の詩——王維の陽関曲を中心として——」と題して、最終講義を行なった。王維の陽関曲は、送別の詩の代表作として天下に有名である。わたくしはこの一首の詩を中心として、一時間にわたって詳細に講義した。

三時半から雅裳苑において、記念送別パーティが開かれた。北海道や静岡県沼津の遠くからも馳せ参じて下さった方もいて、ご厚情は長く忘れられない思い出となろう。

わたくしは三年前、鎌倉に一握りの土地を購入していたので、春四月のころには、転住の予定である。

昭和二六年四月、初めて春花を霞城池畔に賞してから、やがて二〇回目の春がめぐって来ようとしている。この間、何時の間にか山形の街も変貌を遂げて、昔日の比ではなくなった。地下街を含む二階建ての新山形ステーションの偉容、デパートの林立、商店街の繁盛、さては遠く東西南北に延びた住宅街、大学も中央図書館、大学会館、幾つかの新校舎の新設櫛比など旧時に比べて全く面目を一新した。

学生と共に楽しく学問に励んだ過去の思い出は尽きない。楊柳の枝を手折って、山形に惜別の情を寄せる日も近い。今はひたすら、学園の発展と皆様のご自愛をお祈りするのみである。

（山形大学人文学部「人文ニュース」昭和46・2・15）

馮小青伝説と其の戯曲

伝説は一般的には、人類の古き記憶の堆積で、口碑によつて伝へられる物語を意味する。即ち伝説は我等の祖先が宇宙に対して下した解釈・信仰・観念・生活様式及び慣習などに想像の外衣を着せたものゝ蓄積である。（心理研究六十七号、三枝十一氏、民間伝説の興味）伝説が歴史と異なる点は、想像的成分が多く、説明が人生の要求を満足せしめる為に、目的論的になることにある。

神話は人間の世界観や人生観の最も原始的な思想で、主に神や神仙的英雄や宇宙観に関する伝説を網羅し、宗教的色彩を帯びてゐるといふ。（三枝十一氏、民間伝説の興味）

小話は事実の想像化である伝説に対し、想像を事実化せる説話である。

ヴントに従へば小話はその初に於ては成人の話で、此れが後に児童が喜んで聞く童話となるものであるとし、これを神話小話と呼んでゐる。彼は小話の特徴として「(1)話の中の時と処とが不明である。(2)話が呪の因果によつて支配されてゐる。」の二点を挙げてゐる。小話が時間と空間とを超越し、奔放な想像を恣にするに反し、伝説は時と場所とが一定し、史的事件が関係するから、伝説の事件は或る限度を受けて魔力や呪術が消えて行く。小話はもと原神話の変形とみられてゐたが、近世の人種学や歴史的研究は小話を神話の原始形式で分派ではないと見るに至つたとヴン

トは言つてゐる。即ち彼は神話の原始的根本形式と看做される説話の形式として、メルヘン・ザーゲ・レゲンデの三を挙げ、発展の経路として小話・伝説・神話の順序に置かうとしてゐるやうである。（ヴント、民族心理学、第五巻、神話と宗教、第二部）

伝説は既述の如く民族口伝に於て現はれるのであるが、民族口伝は永久的な文字として定着する前に、口伝に於て種々の変化を以て広がる。即ちそれは伝承者の才能や聴者の立場で如何様にも表現し得るのである。さなきだに民衆の胸臆に於ける誇張癖・好奇趣味・理想主義などの潜在は、伝説の外殼を仮構的なベェールを以て被ふに至り、詩人は競つてロマンチックな美しい想像を投げ掛ける。華やかな統一性、それは伝説が文芸の士を刺戟して贈られる洗礼の花束である。斯くの如くにして伝説は、後代の各種文芸の上に濃厚な陰影を投じてゐるのである。

万暦劇文壇の記念碑的雄篇として絶賞される牡丹亭伝奇を繞つて幾多伝説の数々が簇生したが、その中最も有名なものは、馮小青のそれである。私は伝説の人としての小青の輪郭を描き、更にこれを題材として発生した劇文学の一群に就いて少しく論述してみよう。

二

小青は明末の女性であり、場所も江蘇広陵の人として一定し、所謂時間と空間とが一定の束縛を有する。そして事実も超現実的臭味が殆んどない。小青の事は多くの筆記小説中に断片的に伝へられてはゐるが、此れを最も詳細に統一的に伝へてゐるのは小青伝である。そして私の寓目した小青伝に三種ある。明の詹詹外史の情史類略巻十四・清の張山来の虞初新志巻一・及び清の煙水散人の女才子伝巻一に収むるもの是である。三書共其の内容は大同小異であるが、虞初新志のものは小青の没年を万暦四十年壬子としてゐる所に他書に見られぬ特色がある。女才子伝は清の煙水散人が戔戔居士の原伝に稍々編述を加へたものであると自ら小青伝の末尾に述べてゐるが、三者中叙述最も詳細である。三者を対蹠的に転載してみる程のこともなからうから、今は略に従ふことにする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小青姓は馮、名は玄玄（虞初新志巻一小青伝には元元に作る）、小青はその字である。明の万暦二十三年乙未、江蘇省の広陵（揚州）に生る。虞初新志小青伝に曰く

姬夙根穎異、十歲、遇一老尼授心經、一再過了了、覆之不失一字、尼曰、是兒蚤慧福薄、願乞作弟子、卽不爾、無令識字、可三十年活爾、家人以爲妄、嗤之、母女塾師、隨就學、所遊多名閨、遂得精涉諸技、妙解聲律、江東固佳麗地、或諸閨彥雲集、茗戰手語、衆偶紛然、姬隨變酬答、悉出意表、人人唯恐失姬、雖素嫻儀、而風期異豔、綽約自好、其天性也、

と。以て少女時代の小青の環境・才智・教養・容姿・性行を概想することが出来る。

年十六の時、浙江省虎林の馮生の愛妾と為る。女才子伝所収小青伝に

明朝曆昌間、杭州有一馮生者、豪公子也、嘗慕揚州爲天下第一名郡、泛棹往遊、遂託媒嫗、買一小青爲妾、

と見え、馮生が小青を得るに至つた顚末が記されてゐる。小青が妾といふやうな荊の道に進むに至つた動機として女才子伝は

其母貪得金帛、遂不及詳訪淸濁、卽以小青許嫁馮生、

と述べ、其の母の貪欲に帰してゐる。小青は馮生と同姓なので之を諱み、僅かに小青の字を以て云ふと。（虞初新志小青伝、情史小青伝、清邱煒萲、栽園贅談巻之一等）

清の焦循の劇説巻三・清の褚稼軒の堅瓠三集巻二・近人王季烈氏の螟廬曲談巻四に聞見巵言を引いて

馮千秋、浙中名士、崇禎乙亥拔貢（按ずるに崇禎八年。）頗以詩文擅長、家素封、因無子、買妾維揚、得小青、可謂佳人才子兩相遇合、後以妻之妬、置之別業、似亦處之得當、不意小青才雋而年殀、時人詩傳傳奇、歌咏贊歎、遂使人人有一小青在其意中、（中略）以千秋之才、因小青而反沒、不亦寃哉、

とあるを以て、小青の夫を馮千秋と見ようとする者もあることが分る。馮生の人物に就て情史及び虞初新志には「性

嘈唼憨跳不韻」と見え、女才子伝には

小青一見馮生、馮生之狀、嘈唼戚施、憨跳不韵、不覺涙如雨下、慘然嘆息曰、我命休矣、

とあつて、狀貌醜悪、無風流で、跳ねつ返りの小人のやうに記され、聞見巵言の記述とは径庭の差がある。

馮生の妻は嫉妬深くて、小青は遂に孤山の別業に移され、寥閒憂愁の極、疾を獲、牡丹亭伝奇の杜麗娘の例に倣ひ、肖像画を画かせ、万暦四十年壬子年十八を以て逝くといふ。

小青に女弟あり、馮紫雲といふ、会稽の馬髦伯に帰ぐと。虞初新志巻一

小青の遺稿としては、七言絶句十首・七言古詩一首・塡詞一首・尺牘一通が伝へられてゐる。即ち次の如くである。

古詩に云ふ

雪意閣雲雲不流、舊雪正壓新雲頭、米顛顛筆落窗外、松嵐秀處當我樓、垂簾只愁好景小、捲簾又怕風繚繞、簾捲簾垂底事難、不情不緒誰能曉、爐烟漸瘦剪聲小、又是孤鴻唳悄悄、

絶句に云ふ

稽首慈雲大士前、莫生西土莫生天、願爲一滴楊枝水、洒作人間並蒂蓮、

春衫血涙點輕紗、吹入林逋處士家、嶺上梅花三百樹、一時應變杜鵑花、

新粧竟與畫圖爭、知在昭陽第幾名、瘦影自臨秋水照、卿須憐我我憐卿、

西陵芳草騎麟麟、內使傳來喚踏春、盃酒自澆蘇小墓、可知妾是意中人、

冷雨幽窗不可聽、挑燈閒看牡丹亭、人間亦有癡于我、豈獨傷心是小青、

何處雙禽集畫闌、朱朱翠翠似青鸞、如今幾个憐文彩、也向秋風聞羽翰、

脈脈溶溶瀲瀲波、芙蓉睡醒欲如何、妾映鏡中花映水、不知秋思落誰多、

盈盈金谷女班頭、一曲驪珠衆伎收、直得樓前身一死、季倫原是解風流、

鄉心不畏兩峯高、昨夜慈親入夢遙、見說浙江潮有信、浙潮爭似廣陵潮、

其の天仙子詞に云ふ

文姬遠嫁昭君塞、小青又續風流債、也虧一陳黑罡風、火輪下、抽身快、單單別別清涼界、原不是鴛鴦一派、休算做相思一概、自思自解自商量、心可在、魂可在、着衫又撚裙雙帶、

与楊夫人書に云ふ

元元叩首、瀝血致啓夫人臺座下、關頭祖帳、迴隔人天、官舍良辰、當非寂度、馳情感往、瞻睇慈雲、分燠嘘寒、如依膝下、糜身百體、未足云酬、娣娣姨姨無恙、猶憶南樓元夜、看燈諧謔、姨指畫屏中一憑欄女曰、是妖嬈兒、倚風獨盼、恍惚有思、當是阿青、妾亦笑指一姬曰、此執拂狡鬟、偷近郎側、將無似娣、於時角彩尋歡、纏綿徹曙、甯復知風流雲散、遂有今日乎、往者仙槎北渡、斷梗南樓、狺語哮聲、日焉三至、漸乃微詞含吐、亦如尊旨、云云、竊撥鄙衷、未見其可、夫屠肆苦心、餓狸悲鼠、此直供其換馬、不卽辱以當壚、去則弱絮風中、住則幽蘭霜裏、蘭因絮果、現業誰深、若使祝髮空門、洗妝浣慮、而豔思綺語、觸緒紛來、正恐蓮性雖胎、荷絲難殺、又未易言此也、乃至遠笛哀秋、孤燈聽雨、雨殘笛歇、謖謖松聲、羅衣壓肌、鏡無乾影、晨淚鏡潮、夕淚鏡汐、今玆雞骨、殆復難支、痰灼肺然、見粒而嘔、錯情易意、悅憎不馴、老母娣弟、天涯間絕、嗟乎、未知生樂、焉知死悲、憾促歡淹、無乃非達、妾少受天穎、機警靈速、豐玆嗇彼、理詎能雙、然而神爽有期、故未應寂寂也、至其淪忽、亦非自今、結褵以來、有霄靡旦、夜臺滋味、諒不殊斯何必紫玉成煙、白花飛蝶、乃謂之死哉、或軒車南返、駐節維揚、老母惠存、如妾之受、阿秦可念、幸終垂憫、疇昔珍贈、悉令見殉、寶鈿繡衣、福星所賜、可以超輪消劫耳、然小六娘竟先期相俟、不憂無伴、附呈一絕、亦是鳥語鳴哀、其詩集小像、托陳媼好藏、覓便馳寄、身不自保、何有于零膏冷翠乎、他時放船堤下、探梅山中、開吾西閣門、坐我綠陰床、髣生平於響像、見空幃之寂飈、是耶非耶、其人在斯、嗟乎夫人、明冥異路、永從此辭、玉腕朱顏、行就塵土、興思及此、慟也何如、元元叩首叩

首上、

後附の絶句に云ふ

百結迴腸寫淚痕、重來惟有舊朱門、夕陽一片桃花影、知是亭亭倩女魂、（虞初新志巻一小青伝）

以上の外に南郷子詞の上三句が女才子伝巻一及び清の徐電発の詞范叢談巻九に載せられてゐる。左に録す。

數盡懨懨、深夜雨無多、也只得一半工夫、

小青の遺稿は尚数多くあつたのであるが、その死後、妬婦の為に焚かれ、僅に上記のもの丈を伝ふといふ。而して此等の遺作は小青の親戚某氏が集めて刻し、名づけて焚余といふと。（虞初新志小青伝）

小青の詩に対して明の戔戔居士は「小青の諸咏を読むに、凄惋と雖も気骨を失はず。憾むらくは全稿伝はらず。之を要するに径寸の珊瑚、更に自ら憐惜す可きのみ。」（情史類略巻十四）と評してゐる。

小青の遺作は上記の焚余詩草の外に、尚小青・素素二人の合作に成るといはれる牡丹亭骰譜がある。煙水散人の序に女才子伝を輯して後二十余年にして此の譜を発見したから、重ねて校訂を為す由を述べてゐる。巻末に載する原序には小六娘（小青と親交のあつた楊夫人の女で早世すと）の篋中の故物であつて、小青が小六娘に伝示したものだと記されてゐるが、恐らく文人の戯筆であらう。今昭代叢書合刻所収本の冒頭半葉余を示せば左の如くである。

驚夢　恨不得肉兒般團成片（青）
回生　要他風神笑語都無二（素）

寫眞　箇中人全在秋波妙（青）
訓女　閒搨着鴛鴦繡譜（素）

寫眞　忠苗條斜添他幾葉翠芭蕉青
勸農　平原麥酒翠波搖素

三

小青が牡丹亭伝奇を愛読し「冷雨幽窗不可聽、挑燈閒看牡丹亭、人間亦有癡于我、豈獨傷心是小青、」の一詩を賦したといふ薄命佳人の傷心の物語、一度出づるや、江湖の好奇心を揺盪せずにはおかなかつた。小青埋骨の地と云はれる孤山を訪ふ者は、必ずその墓を尋ね詩を作つて之を弔し、文人は為に幾度か伝を作り、作劇家は之を劇詩化して永劫に伝へんとした。斯の如くにして明末に発生した小青の傷ましき物語は、彼の土文壇の好話柄となつた。

清の徐電発は画舫を泛べて孤山に至り、小青の墓を尋ねて得ず。同行の中溪子が銷魂一半是孤山の句を微吟するや電発は口に信せて之を足成して云ふ。

青青芳草瘞紅顏、愁對雙峯似翠鬟、多少西陵松柏路、銷魂一半是孤山、

と。相与に拍浮叫絶、酒痕墨瀋、幾んど衫袖を汚す。酒半にして処士祠中に小憩し、韻を分つて漁家傍一関を賦すといふ。同行者、冶湄の作つた詞に云ふ

面面蓮漪呈繡穀、蒲小荇分新綠、何處閒情聲陸續、人爭逐、畫橈龍笛吹寒玉、幾負芳辰空鹿鹿、五絲誰倩春纖束、寂寞香魂遺恨觸、尋芳躅、一阡荒草銷金屋、

と。中溪子の詞に云ふ

湖面晴分錦帶繞、午風謖謖笙歌裊、畫艇飛來聞語笑、恣遠眺、蒲樽催動紅顏早、涼起孤山停晚棹、梅銷鶴去青苔老、一任閒雲籠翠篠、人懊惱、蛾眉碣蝕香魂杳、

と。徐電発の詞に云ふ

艾虎釵符懸百結、蘭橈重汎菖蒲節、影漾湖心清又徹、無休歇、子規枝上聲聲血、瘞玉埋香魂斷絕、銀濤江上空嗚咽、莫把靈均閒話說、春纖捏、半灣邂逅沈檀屑、

と。清徐電発詞苑叢談卷九 清焦循劇說卷三

陳雲伯嘗て小青の墓を孤山の麓に築き、並に附するに雲友菊香を以てし、且つ之が誌を為つて之を徵し、また蘭因館を建てゝ之に実て詞苑の清談を増したといふ。清梁紹壬、兩般秋雨盦隨筆卷一、清邱煒萲、菽園贅談卷之一当日諸氏題詠の作あり、其の時の佳句が兩般秋雨盦隨筆卷一に収録されてゐる。即ち次の如くである。

陳雲伯大令文述の原唱に云ふ

芳姓偶同楊妹子、小名應喚菊夫人、

と。方稚韋考廉懋朝の句に云ふ

樂府好歌三婦艷、鄉親況有六朝人、

と。吳飛卿女史規臣の句に云ふ

桃葉畫船題葉女、梅花禪榻散花人、

と。大令の媳、汪小韞女史端の記事四首最も佳である。

その詩に云ふ

鄭家嬌婢解吟詩、和靖風流想見之、遺址誤尋高菊磵、前身合是謝芳姿、踏青春訪瓊姬墓、飛白宵題玉女碑、更乞茂漪書一過、簪花楷法妙臨池、

焚餘詩草返魂香、遺集眞應號斷腸、齊國淑妃原著姓、蔣家小妹是同鄉、鏡湖桃葉鷗盟遠、畫閣梅花鶴夢涼、最憶橫波摹小影、眉樓一角寫斜陽、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com